

辻まこと著『山からの絵本』

題名のとおり絵本である。湖畔の掘っ建て小屋での行雲流水を友とした生活、山に暮らす人々の哀歓、夜の囲炉裏端で聞いたありそうにもない話、猟師や山師の大法螺、毛物たちの話、・・・これらが暖かい筆致のペンと絵筆で綴られている。

文章も楽しいが、絵がまた雅趣があってほのぼのとしてくる。素っ裸の男女二人が月夜の山中の湖で泳いでいる絵は、青い月光がキラキラと波紋に反射して水面の騒めきさへ聞こえてくるような何とも幻想的な風景で圧巻である。また、バンドリやタヌキなどとの交歓を描いた山のケモノ達の絵も生き生きとして野趣がある。

辻まことは、生涯定職と言えるものを持たず、放浪の一生であったが、それ故、詩、散文、絵、彫刻、ギターなどの天賦の才が惜しみなく開花したのであろう。

『虫類図譜』のアフォリズム、『ノイローゼよ さようなら』の広告漫画カリカチュアなど、世相への深い洞察もこの放浪の賜物であろうか。『岳人』の表紙や秀山荘の広告でご覧になった方も多いと思う。

この本が出版されたのが昭和41年、私が就職した年であった。それまで雑誌『アルプ』などで辻まことの画文は読んでいたが、単行本を買ったのはこの本が最初であったと記憶している。奥付を見ると定価1,500円とあり、私の初任給が2万5千円であったから、たった一冊の本に、食うや食わずの新入社員としては大枚を叩いた訳である。

山に纏わる話題と言っても、所謂スポーツ登山のことではなく、山の暮らしや生業といったものをユーモア溢れる筆致で描いてあり、また対象に対する暖かい共感が随所に滲み出ている、それ故にそこはかかない郷愁を誘われる。今読み返してみても実に新鮮である。

「夏の湖」の中のケルビの浦や「小屋ぐらし」のツブラ湖が実際に何処にあるかを尋ね当てて訪れてみたい気もするが、これはやはり物語の世界の中の想像に留めておくのが相応しいであろう。近年全集が集大成・刊行され、辻ファンにとっては嬉しいことであるが、高価なのが惜しい。

40年近く前の『アルプ』を繙いてみると、辻まこと、尾崎喜八、串田孫一、山口耀久、岡田喜秋、朝比奈菊雄などの詩文や随想、大谷一良、曾宮一念、畦地梅太郎などの絵や版画などが『アルプ』独特の世界を作っており、勉強はそっちのけでこのような世界に憧れていた学生時代のことを思い出す。

私事で恐縮であるが、世の中の厳しさが未だ分からず、ただ徒に（やみくもに）出版社か新聞社へ就職したかった私は、当時北の丸公園の近くにあった彼ら

「アルプ同人」達の本を出版している「創文社」に、求められもしないのに履歴書を持って押しかけたりした。出版の世界とは似ても似つかないコンピューター商売に浮き身をやつした挙げ句に還暦を迎えた私にとって、辻まことや串田孫一などの本は、恥ずかしながら甘酸っぱくてほろ苦く、それでいてそこはかたなく懐かしい、遠く過ぎ去った青春の思い出である。

1966年創文社刊（最近はやまけい文庫にもあり）。

（2003年3月 記）

